追悼　中西睦子先生

林　千冬

本学の初代学長を務められた中西睦子先生が、昨年 2015 年 5 月 4 日に逝去されました。「巨星墜つ」――看護界の貴重なリーダーのひとりを失ったことに茫然自失するほかありませんでした。

ご略歴

中西睦子先生は、1958 年に静岡赤十字高等看護専門学院をご卒業後、看護師経験を経て、1969 年に明治大学文学部第二部をご卒業。同年から 1983 年までは神奈川県立衛生看護短大の教員を務められました。この間の臨床指導経験を踏まえ上梓された、『方法としての看護過程』、『臨床教育論』（ゆみる出版）の 2 冊は、今なお多くの新鮮な発見と学びを与えてくれる看護学教育に関する名著です。

1979 ～ 1980 年には、ニューヨーク大学教育学部に文部省在外研修員として、さらに 1984 年からはミネソタ大学大学院修士課程看護学専攻に留学され、看護学修士の学位を取得されています。

この間の留学経験をもとに、雑誌『看護』への連載を経て 1987 年に出版されたのが、『看護で使うアメリカことばー理論用語の周辺』（日本看護協会出版会）。当時から看護学に頻繁に登場していた「個人」「共感」「セルフケア」etc. といった、わかったようでわからない基本用語について目からウロコの解釈を加えていく本書は、文章の軽妙洒脱さも含めて、私が中西睦子先生という人を知り、大ファンになったきっかけにもなりました。

アメリカからご帰国後は、1986 年から日本赤十字看護大学、1992 年から広島大学、そして 1996 年から 2002 年までの 6 年間、初代学長として本学の草創期をリードされました。そして本学を去られた後、2004 年から亡くなる前年の 2014 年までの長きに渡り、国際医療福祉大学で後進の育成に務められました。

リーダーとして、教育者として

中西先生は、数々の学会で重要な役割を担われ、日本の看護学の確立に中心的役割を果たしてこられました。特に、1999 年から 2001 年には日本看護科学学会の理事長、1996 年から 2002 年には日本看護管理学会の理事長という大任を果たされました。

実は私は、先生の後任教授で、他大学でご一緒したこともありませんし師弟関係にもありません。私が初めて先生に直に接したのはもう 20 年以上も前、看護師不足問題をテーマにしたあるシンポジウムでした。「みなさん、敵は誰なのかを見失ってはいけません」と発言された凛とした姿に打たれました。以来、私にとっての先生は、ずっとアカデミックだけれどポリティカルな「かっこいい大先輩」であり続けています。

その後、日本看護管理学会の前身である看護政策研究会の席上で声をかけていただいたのが関係の始まりです。その時何をお話ししたのかは覚えていませんが、その後先生は私に、学会や文部科学省関係のお仕事の機会をいくつも与えてくださいました。けれどそれは私に限ったことではなく、先生は当時の多くの若手――特に「元気で生意気な若手」に対して、何かにつけ目をかけチャンスを与えてくださる方でした。

2011 年に病を得られて以降、入院の時も在宅療養の時も、ご家族と共に先生の療養を支えてこられたのは、国際医療福祉大学の大学院生さんや修了生さんたちだったとうかがっています。そして、看護を受けつつも常に看護を説かれ、亡くなる前日にも、まもなく留学に向かう修了生さんを叱咤激励されていたのだと後に聞き、本当に先生らしいなと、最後まで先生は先生だったのだなと思います。

あざみの花言葉は「自律」

私が先生と唯一お仕事をご一緒させていただいたのは、2012 年夏の『看護管理』誌上での対談でした。「ナースよ、リアリストたれ」という先生ご提案のテーマでしたが、今なおリフレインしているのは、対談の中で、つい「イマドキ

の学生は…」と愚痴をこぼしてしまった私を、「林さん、あなたはいったいどういう学生を育てたいの！？」と高らかに笑い飛ばされた先生の声です。

先生は、長い教員経験を経られてなお、学生に潜在する「自己学習力」をとことん信じておられる。「教員は教え込みすぎるな」が一貫したテーゼで、それはまさに、学生の主体性・自律性をどう引き出すかに直結しており、翻ればそれは、教員としての主体性・自律性をも鋭く自問させられることにもなるのです。

神戸市看護大学のシンボルマークはあざみの花。あざみの花言葉は「自律」です。初代学長であった中西先生が、本学の建学の理念として据えられた「自律」の意味を、反省とともに再認識させられる機会になりました。

この対談から亡くなられるまでの数年間、季節ごとにお好きだったビールを私がお贈りしては、先生からメッセージ一杯のお葉書をいただくという関係が、短い間でしたが続きました。国際医療福祉大学退官前の冬に大学をお訪ねしたときは、タクシーでの出勤直後、顔面蒼白で息も絶え絶えのご様子に驚きましたが、語り始めればたちまち声に張りが出て、近年の社会情勢、政治経済、そして看護教育のあり方について等々と、刺激的なお話をたっぷり聞かせていただくことができました。これが、先生との忘れられない思い出となりました。

遺稿『異端の看護教育』

最後に、中西先生が逝去直前に脱稿された、『異端の看護教育』（医学書院）をご紹介したいと思います。

表紙を開けばいきなり挑発的な目次の数々が目に飛び込んでくるこの著書に、通底する第一主題は「生意気なナースを育てなさい」。

生意気なナースとは、わがままなナース。「自分の権利に自覚的で、言葉だけの『厚化粧』を振り払って、患者の側に身を置きながら、成熟した『怒り』とともに、現実の看護とその実践の姿をリアリスティックに捉えて、課題を見出し、自ら変えていこうとするナースたちのこと」。規制の枠にはまらずに考えるということ自体がリアリズムだと先生は言われます。

そして、教育は教育者だけの仕事ではない。生意気で、新たに発信し、リーダーシップを担える層をどう育てていくかを問われるのは管理者も同じで、そこに必要なのはマネジメントだけでなく、大所高所から組織全体を俯瞰できるアドミニストレーションの力。なぜなら、「『敵は誰か』を見失ってはいけない」から――このくだりを読んだとき、私には20年以上前の、壇上で輝く中西先生の姿がまざまざと思い出されたのでした。

書名には「異端」とありますが、実はこれは「先端」でしょう。「看護教育」とありますが、本書の内容は、教育する側、学ぶ側、すなわち全てのナースに向けられた、先生からの壮大な遺言として受け止めなければと思います。

中西先生、ありがとうございました。私は、本学の初代学長が中西先生であったことを心から誇りに思います。これからも天上から、厳しくも温かいまなざしで私たちをお見守り下さい。